

出エジプト記28章「執り成す祭司」

1A 装束の聖別 1-5

2A エポデ 6-14

1B 撚り糸で織られた亜麻布 6-8

2B 肩当て 9-14

3A 胸当て 15-30

1B 十二の宝石 15-21

2B 金の鎖 22-30

4A 青服 31-35

5A 被り物 36-38

6A 長服 39-43

出エジプト記 28 章を開いてください。私たちの学びが、幕屋についての神の教えを見ていきます。これまで、幕屋に置かれる祭具、そして幕屋の構造について主はモーセにお語りになりましたが、次に、その幕屋に奉仕する大祭司についてモーセに教えられます。28 章と 29 章にあります。28 章では大祭司の着る装束であります。

私たちは今、福音書を礼拝の時に学んでいますが、イエス様の公生涯が大いなる奇跡を行われる預言者としての働きがあるけれども、そこには、病の人、囚われている人に近づき、その人たちを解放するという、仕える姿を見ることができます。そしてキリストは、ご自身が引き渡されて、十字架で死なれ、三日目に甦ることを告げられました。神であられるのに、その身分に固執されず、かえって虚しくされ、十字架の死に至るまで忠実であられました。それゆえ神はこの方をよみがえらせ、天に引き上げ、今は神の右の座に着かれて、私たちのために執り成しておられます。こうしたイエス様の働きを、ヘブル人への手紙では大祭司の働きとして、イエス様が全うされたものなのだと解説しているのです。幕屋は、地上における天にあるものの模型であることをお話ししましたが、大祭司は天におられる偉大な大祭司イエス様を表している存在であります。

私たちは再び、幕屋の中における、イエス・キリストの福音を見ていくこととなります。そして、イエス様に付いて行くキリスト者が、祭司としての務めがあることにも触れていきたいと思えます。幕屋が天の模型であると同時に、聖霊の住まれる教会も示していることを話しましたが、大祭司はイエス様ご自身ですが、祭司たちが聖所で神に仕えるのは私たちキリスト者をも示しています。「I ペテ 2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」

1A 装束の聖別 1-5

1 あなたは、イスラエルの子らの中から、あなたの兄弟アロンと、彼とともにいる彼の息子たちのナダブとアビフ、エルアザルとイタマルをあなたの近くに来させ、祭司としてわたしに仕えさせよ。

主は、イスラエルの子らの中から、モーセの兄アロンを祭司として選ばれ、そしてその直系の男子が代々、祭司職を受け継ぐことに定められました。イスラエルの歴史の中で北イスラエル王国の初代王ヤロブアムが、勝手に祭司を選び、金の子牛をベテルとダンに造らせましたが、祭司は人が召すものではなく、神ご自身によって召されるものです。ここでも、主ご自身が名指しでアロンを呼び、またその息子たちを神に仕えるように召しておられます。私たちの主は、同じように父なる神ご自身に、「これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」と言われて、召し、選ばれ、そしてイエス様は父なる神に仕えるようになりました。私たちがキリストにあって、神に召されて、それで神に仕えている者たちです。

祭司とは、どのような存在かをヘブル書の著者がこう言っています。「ヘブル 5:1-5 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているので、無知で迷っている人々に優しく接することができます。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。」ヘブル書には、他の箇所でも、イエスは罪こそ犯されなかったけれども、すべての試みを受けられたことを書いています。したがって、自分自身のための罪の供え物はする必要はありませんでしたが、他の人々に同情し、それゆえ神の前に、民を代表して近づくことができました。祭司は、神の前に人々を代表するために出ていき、また人々に対して、神の恵みと祝福を携えて、それを分かち合うために出て来ます。神と人との仲介者です。

2 また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。

装束は、「聖なるもの」であり、かつ「栄光と美を表す」ものでありました。これまで私たちは幕屋の中身を見ましたが、その装束は、幕の撚糸で織られた亜麻布や板や祭具に貼られている金など、ほとんど同じ栄光と美しさをもったものです。それは、神の栄光と麗しさを示しているものです。イエス様の生涯を、まさに表しているものです。ヘブル書 1 章 3 節に、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」とあります。私たちが人としてのイエス様が、それでも高い山に登られて、神の国におけるご栄光で輝いたところを見たところでは、イエス様は、ピリポに「父を見せてください」と聞かれた時に、「ヨハ 14:9 ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。」と言われました。ですから、視覚的に栄光と美に輝いているだけでなく、その行われた業に父の栄光とその美しさが隠されていま

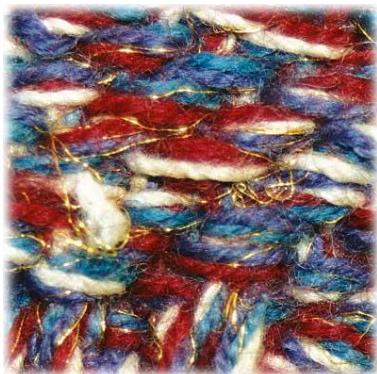
した。イエス様が嵐を静められた時に、弟子たちは恐ろしくなりましたが、なぜならそこに神の偉大な力と聖さが示されていたからです。ですから、イエス様を見たら、父の栄光が見ていたのです。

3 あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵ある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなさい。彼を聖別し、祭司としてわたしに仕えさせるためである。

幕屋にしても、最初の装束にしても、それを造るのには相当の技術がないとできません。けれども、その能力は聖霊による知恵が必要であり、知恵の霊で満たされた人を主は、後で名指しで召されます。

4 彼らを作る装束は次のとおりである。胸当て、エポデ、青服、市松模様の長服、かぶり物、飾り帯。彼らは、あなたの兄弟アロンとその子らが、祭司としてわたしに仕えるために、聖なる装束を作る。5 彼らは、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに亜麻布を受け取る。

主は、表にある中心的な部分から、体の中身に装着するものの順番で語られています。胸当てが、胸のところに着いていますね。そしてエポデはエプロンのように肩からかけるものです。ただエプロンと違い、前面だけでなく、背面の二面になっています。そしてその下に、青服、さらにその下に市松模様の長服です。そして、被り物が頭部にありますね。そして最後に、エポデを体に固着させるための飾り帯が言及されています。



そして、それらの着物の材料が、幕にととても似ていることにお気づきでしょう。青、紫、緋色の撚り糸、そして亜麻布です。そして新たに、「金」があります。金を撚り糸の一つとして使います。金は、神の栄光の輝きそのものを示します。天からのエルサレムは、透き通ったガラスのような純金で出来ていることが、黙示録 21 章にあります。

2A エポデ 6-14

1B 撚り糸で織られた亜麻布 6-8

6 彼らに、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて、意匠を凝らしてエポデを作らせる。7 二つの肩当てが、それぞれエポデの両端に付けられ、エポデは一つに結ばれる。8 エポデの上に来るあや織りの帯はエポデと同じ作りで、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、エポデの一部となるようにする。

初めに、体にかけるエポデから主は語られます。それぞれの色に靈的意義があります。今説明しましたように、金色は神の御座にある栄光です。青色は天の色です。紫は、キリストの王位でありました。イエス様がローマの兵士から紫の衣と、茨の冠を宛がわれ、「ユダヤ人の王さま、ばんざい」と言うからかいを受けました。そして緋色は血の固まったような色であり、キリストが流された血を表しています。したがって、これはキリストが人の姿を取りながら、なおのこと神の栄光を携えている仲介者としての姿を表しています。「I テモ 2:5-6 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。これは、定められた時になされた証しです。」

そしてエポデは、肩当てによって前面と背面の二つが一つに結ばれています。大祭司の装束には、エポデが腹巻きのように腹の部分だけのものと、胸の部分も多い、肩にまでつながっているものの二つがありますが、私はこの表現から肩にまで広がっているもの、つまり、先にお見せしている絵のようなものではないか？と思います。

2B 肩当て 9-14

9 二つの縞めのうを取り、その上にイスラエルの息子たちの名を刻む。10 六つの名を一つの石に、残りの六つの名をもう一つの石に、生まれた順に刻む。11 印章を彫る宝石細工を施して、イスラエルの息子たちの名をその二つの石に彫り、それぞれを金縁の細工の中にはめ込む。12 その二つの石をエポデの肩当てに付け、イスラエルの息子たちが覚えられるための石とする。アロンは【主】の前で、彼らの名が覚えられるように両肩に載せる。13 あなたは金縁の細工を作り、14 また二本の純金の鎖を作り、これを編んでひもとし、このひもの鎖を先の細工に取り付ける。



エポデを身に付ける時はちょうど、上からかぶるようにして、頭を入れて着るのですが、その肩掛けには、「肩当て」がありました。そこに「縞めのう」の石を入れます。そしてイスラエル十二部族の名が刻み込まれています。宝石には、イスラエル部族の名が刻み込まれます。生まれた順ですから、片方には「ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ」と刻まれ、もう片方には、「ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン」と刻まれています。そして、それが「金のわく」にはめ込まれています。つまり、神の御座の栄光の中で彼らが覚えられているということです。大祭司は、主の前でこのように覚えられるように、イスラエル十二部族の名を肩に背負っているということです。

ここでイザヤの預言を思い出します。バビロンはペリシアによって滅ぼされて、ベルなどの偶像を背負って逃げなければならなかったのに対して、イスラエルはむしろ主によって背負われて生きてきたことを主ご自身が述べておられます。「46:1-4 「ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの

像は獣と家畜に載せられる。あなたがたの荷物は、疲れた動物の重荷となって運ばれる。彼らとともにかがみ、ひざまずく。重荷を解くこともできず、自分自身も捕らわれの身となって行く。ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。」これが主ご自身の思いです。

主イエスご自身が、イスラエルのことを「失われた羊」としてみなしておられました(マタイ 15:24)。そして、ご自身が失われた羊を捜しに来られたことを話しておられましたが、そのの時に見つけた羊飼いが迷った羊を肩に載せて連れてきたことをイエス様は譬えの中で語られています。「ルカ 15:4-6 「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うでしょう。」これが、失われている者に対するイエス様の思いであり、また名を肩に載せているイエス様の思いです。

そしてこの石が金の枠にはめられているのですが、天において名が覚えられていることを示しているのではないのでしょうか。「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

3A 胸当て 15-30

1B 十二の宝石 15-21



15 あなたはさばきの胸当てを意匠を凝らして作る。それをエポデの細工と同じように作る。すなわち、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて作る。16 それは正方形で二重にする。長さ一ゼレト、幅一ゼレト。(これは、一手幅のことです) 17 その中に宝石をはめ込み四列にする。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。18 第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。19 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。20 第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれる。21 これらの宝石

はイスラエルの息子たちの名にちなむもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。それらは印章のように、それぞれに名が彫られ、十二部族を表す。

大祭司の胸当てですが、「さばきの胸当て」と書かれています。これは、胸当ては後で出て来ますが、袋状になっており、そこに二つの石を入れて、神の御心を知るのに使われるからです。主のみこころを求める祭司ならではの姿です。そして、胸当てもエポデと同様に、金、青、紫、緋色の燃糸で、亜麻布を用いて作られます。大きさは正方形をしています、至聖所の形と同じですね。三つの部族ごとに四列ですが、イスラエルが荒野の旅をしている時、幕屋の周辺に東西南北にそれぞれ三部族ずつが宿営しますし、天のエルサレムにおいてはそれぞれの方角に、三つの門があり、イスラエルの名が記されていることが書かれています。



ここでも、大祭司の肩にイスラエル十二部族の名が記されていただけでなく、宝石一つ一つにもイスラエルの名が刻まれています。例えば、右にあるのはエメラルドの宝石ですが、シメオンと記されています。こんな感じで一つ一つの宝石に名が記されています。

そして、縞瑪瑙もそうでしたが、なぜ、イスラエル十二部族の名が宝石の中に刻まれているのでしょうか？それは、主の御座は宝石の輝きでいっぱいだからです。主の前に仕えていたケルビムが宝石の輝きを持っていました。「エゼ 28:12-13 あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。」そして、黙示録 4 章には、主の御座が宝石の輝きを放っている姿を描いています。天のエルサレム、神の都は十二の宝石の土台石によって成り立ち、それぞれが使徒の名が記されています。「21:19-20 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。」それぞれ微妙に宝石の種類が変わっているのですが、それは神の栄光の輝きを示しているのであって、反射の角度などにより、その輝きが変わっているからであります。

先ほどの大祭司の装束が「美」とも形容されており、この宝石がその美の部分であると言えるでしょう。その麗しさの中にそれぞれの名が刻まれているのです。

2B 金の鎖 22-30

22 また、胸当てのために、燃ったひものような鎖を純金で作る。23 胸当てのために金の環を二個作り、その二個の環を胸当ての両端に付ける。24 その胸当ての両端の二個の環に、二本の金のひもを付ける。25 その二本のひものもう一方の端を、先の二つの金縁の細工と結び、エポデの肩当ての前側に付ける。26 さらに二個の金の環を作り、それらを胸当ての両端に、エポデに接する胸当ての内側の縁に付ける。27 また、さらに二個の金の環を作り、これをエポデの二つ

の肩当ての下端の前に、エポデのあや織りの帯の上部の継ぎ目に、向かい合うように付ける。28 胸当ては、その環からエポデの環に青ひもで結び付け、エポデのあや織りの帯の上にあるようにし、胸当てがエポデから外れないようにしなければならない。29 このようにして、アロンが聖所に入るときには、さばきの胸当てにあるイスラエルの息子たちの名をその胸に担う。それらの名が、絶えず【主】の前で覚えられるようにするためである。

胸当てが、金の鎖によって肩当てに結ばれ、またエポデにも結ばれます。そして、青ひもによってエポデに結びつけるので、しっかりと胸から外れないように固定されます。その目的は、「アロンが聖所に入るときには、さばきの胸当てにあるイスラエルの息子たちの名をその胸に担う。」ということです。主の前に聖所の中に出ていく時に、その名が覚えられるようにするためです。こうやって、人となられてイエス様は、その胸の中に一人一人の名が記されていることがよく分かります。

イエス様がなぜ、エルサレムを見て嘆き泣かれたのかが、よく分かりますね。「ルカ 13:34 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」ここでは、めんどりが翼の下に集めようとしていたとありますが、主のイスラエルに対する心を知ることができます。そして、使徒ヨハネは、自分がイエス様の御胸のそばにいたことを誇らしげに書いています。「ヨハ 13:23 弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。」これは、過越の食事の場面ですが、当時は横たわって食べていました。それでイエス様の胸に近い所にヨハネが開いた、それだけ至近距離であったということです。また、ペルガモンにある教会に対してイエス様は、「黙示 2:17 勝利を得る者には、…白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている。」とあります。これだけ、主は私たちが神の前に私たちの名をもって出て行ってくださっているのです。

30 さばきの胸当てにはウリムとトンミムを入れ、アロンが【主】の前に出るときに、それがアロンの胸の上にあるようにする。アロンは絶えず【主】の前に、イスラエルの息子たちのさばきを胸に担う。

胸当ては袋状になっていますが、その中に「ウリムとトンミム」がありました。訳しますと「光と完全」であります。宝石だったのでしょうか、その材質や形状は知られていません。使われた目的だけは知っています。「さばき」とあります。イスラエルが、例えば戦いに出る時に、具体的にそれが御心なのかどうか知ろうとする時に、大祭司がウリムとトンミムによって、「はい」か「いいえ」を神に伺います(民数 27:21)。つまり、自分ではなく主によって戦いに臨む、ということです。こうやって、大祭司はイスラエルの民に対する神のみこころを求めていました。イエス様は、私たちに対する神のみこころを求めて、いつも執り成してくださっています。「ロマ 8:34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の

右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていただきますのです。」

4A 青服 31-35

31 エポデの下に着る青服を青の撚り糸だけで作る。32 その真ん中に、首を通す口を作る。その口の周りには、ほころびないように織物の技法を凝らして縁を付け、よろいの襟のようにする。33 その裾周りには、青、紫、緋色の撚り糸でざくろを作る。その裾周りのざくろの間には金の鈴を付ける。34 すなわち、青服の裾周りに、金の鈴、ざくろ、金の鈴、ざくろ、となるようにする。35 アロンはこれを、務めを行うために着る。彼が聖所に入って【主】の前に出るとき、またそこを去るとき、その音が聞こえるようにする。彼が死ぬことのないようにするためである。



青服の説明です。エポデの下に着ているものです。「青」は天を表していますね。エポデは地に来られたイエス・キリストの御業を示していましたが、この方の本質は天にあります。

青服の下には何かが付いています。それがこの、青色の糸を丸めたざくろの形をしたものと、金の鈴が交互に付いているのです。そしてなぜこれが付いているのかと言いますと、死なないためであるとありますが、その音がなぜ死なないようにさせるのか、よく分かりません。よくある話は、大祭司に紐をつけて、彼が至聖所に入って何か過ちを犯したら、彼はその場で死んでしまいます。すると鈴の音は消えます。それで大祭司が死んでしまったことを知るのですが、誰も至聖所の中には入れないので、紐によって引き出す、というものです。それだけ至聖所の中が聖いということを示してはいるのですが、聖書の中には大祭司に紐を付けていたという記述はありません。

ヒントとなるのは、ルカによる福音書1章で、バプテスマのヨハネの父ザカリヤが神殿に入って香をたくことになっていましたが、その間、民が外で祈っていたとあります(10節)。イスラエルの民が、大祭司が聖所の中で何を行なっているか、祈りつつ意識していくのに助けになったのではなにか、というものです。ですから、その音は、紐ではなく、民の祈りによって彼が過ちを犯すことなく守られ、その命が守られるため、ということではないか、というものです。

5A 被り物 36-38

36 また、純金の札を作り、その上に印章を彫るように『【主】の聖なるもの』と彫り、37 これを青ひもに付け、それをかぶり物に付ける。それがかぶり物の前面にくるようにする。38 これがアロンの額の上であって、アロンは、イスラエルの子らが聖別する聖なるもの、彼らのすべての聖なる献上物に関わる咎を負う。これは、彼らが【主】の前に受け入れられるように、絶えずアロンの額の上に

なければならない。

大祭司は、肩、胸当てだけでなく、頭の上にもイスラエルの民を覚えていました。そして、それは彼らの咎を負うこと、つまり、彼らのために神の前で罪の赦しの執り成しをすることです。そのことによって、彼らが「主への聖なるもの」となるべく祈るのです。これはもちろん、私たちの主、イエス・キリストが私たちのために執り成しの祈りをささげ、そして私たちが聖なる者として神の前に立つことができるようにしてくださっているのです。

The Golden Crown of the High Priest
אֲזָזִית



主は私たちのために咎を負ってくださっています。先ほど読んだ、ローマ 8 章 24 節に、罪ありと私たちがされる敵の攻撃があるのですが、神の右に着座されて執り成しをしてくださっています。そして、ヨハネ第一 2 章にも、このようなイエス様の弁護があります。「2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。」すばらしいですね、イエス様はご自身を三度知らないというペテロのことで、サタンが彼を振るい落とそうとしたけれども、執り成しをしたことを言及しておられましたね。そうやって、私たちが絶えず聖なるものとして神の前に出て行けるように、いつも覚え、執り成しておられるのです。

6A 長服 39-43

39 さらに亜麻布で市松模様の長服を作り、亜麻布でかぶり物を作る。飾り帯は刺繍を施して作る。



一番下には、長服があり、それは亜麻布で作られた市松模様の服です。ですので、これは白色です。

40 あなたはアロンの子らのために長服を作り、また彼らのために飾り帯を作り、彼らのために、栄光と美を表すターバンを作らなければならない。41 これらをあなたの兄弟アロン、および彼とともにいるその子らに着せ、彼らに油注ぎをし、彼らを祭司職に任命し、彼らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせよ。42 彼らのために、裸をおおう亜麻布のももひきを作れ。それは腰からももまで届くようにする。

大祭司は長服の上に青服、そしてさらにエポデや胸当てを身に着けていましたが、アロンの息子であるその他の祭司たちは、この亜麻布で作られた長服を身に着けました。そして飾り帯は刺繍を施して作ります。さらに、大

祭司もそうですが、全てが股引をはきます。今のようにパンツをはいているわけではありませんから、裸を隠すためのものです。こうやって、礼拝において主から目を引き離すようなものを取り除きました。私たちが聖く生きるには、主から目を逸らすようなものは極力、避けるべきですね。

43 アロンとその子らは、会見の天幕に入るとき、あるいは聖所で務めを行うために祭壇に近づくとき、これを着る。彼らが咎を負って死ぬことのないようにするためである。これは彼と彼の後の子孫のための永遠の掟である。

最後に永遠の掟であると強調していますが、ずっと後世に至るまで彼らはこの装束を身に着けていました。そして、その目的は、「罪を負って死ぬことのないようにするため」とあります。白い服が、彼らを打たれて死ぬことがように守っていたのです。これが七つの教会や聖徒たちに約束されていたことで、キリストの義を身に着け、その正しい行いを身に着け、それが天における姿として描かれています。サルデイスの教会に対するイエス様の言葉です。「黙示 3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」次は、大患難において殉教した聖徒たちの姿です。「7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」そして、天におけるキリストの花嫁の姿です。「19:8 花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

私たちはこのように、何を着ているかが試されています。パウロは、古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着けなさいということを勧めています。「エペ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」そしてローマ 13 章には、「主イエス・キリストを着なさい。」と命じられています。裸のままではいけない、主の祝宴に出るのだから義を身に着けていきなさいということです。

今回は、祭司の任命式についての教えを読みます。